

## 大 学 の 講 義

福 井 英 一 郎

今年もまたこの大学で地理学科の特別講義を仰せつかり、前半毎週一回顔を出すことになった。この機会に少し大学の講義について考えていることを記して見たい。

日本では戦後の学制改革によって新しく方々に沢山の大学が生れたが、その最も大きな特長は同じ大学とは言っても非常に種類が多いことで、これはその全体の数が一度に戦前の数十倍にも膨脹したのだから当然のことであろう。したがって大学によってその性格や目的が非常にちがっているために講義を始めるに当たってもいわゆる“人を見て法を説け”で、それぞれの学校の特性に合わせて考えねばならず、極端に言えば大学ごとに別々の計画を立てねばならないほどである。しかし、それでもなおこゝではっきり言えることは大学はどこまでも大学であり、短大その他特別のものを除外すれば、大学は現在の小学校から高等学校までつながっている教育体系とは本質的にかなりちがった性格や目的をもっていると思う。それは高校の先生までは主として正確な知識の伝達だけが大きな使命であるのに対して、大学では教育以外にそれぞれが研究という任務をもっており、またこのことこそが大学を特長づけている最大の要素ではないかと考える。たとえば、大学の自治というのも、結局は時の権力や外部の勢力から研究の自由を守るための必要から生じたものであり、研究があるからこそ与えられている特権で、高校以下の学校では到底考えられないことで、大学でも主として研究者を対象としたものとするべきであろう。

それでは研究とは何であろうか。細かく議論したらきりがなが、要するに私の考えではいろいろの観察・実験・思考などを含めた高度の知的活動によって、既成の学問体系を確認あるいはこれを拡張・追加し、さらに進んで新しい事実や方法などの発見によって今までの理論をくつがえし、新しい独自の体系を創造するというような非常に高度の知的作業であろうと思う。したがって大学では未だ学界その他の公認を経ないような独自の見解を述べることも許されるのであって、こゝに大学の自由が存在する。ただこの場合に学生側にはある程度の批判が必要になって来て、自己の判断によって適当に取捨選択しなければならないが、これもやはり大学だけに見られることであろう。昔ある大学の先生から聞いた話であるが、その先生が一般の聴衆を前にしていろいろの学説をならべて説明されたところ、“一体どれが正しいのですか、早くどれか一つにきめて下さい”という声がかかったそうである。それは相手をよく見ないで、ついついものように大学流の講義をされたために起った喜劇であろう。一方高校までの段階では、いわゆる教科書的の、既に今日までに

確認されている定説についての説明が教育の中心であり、自分だけの考え方や新しい学説の紹介などは原則的には禁ぜらるべき性質のもと考えられ、その教科書についても同じことが言えると思う。

たとえば高校の地理の教科書にはその人だけの考え方による世界の気候区分などが見られるが、これは少なくとも今述べたような私の意見には相反するもので、この種のことは大学で学ぶべきものではなからうか。しかしこれとてもあくまで私一箇の考え方であり、これと対立的の意見があっても一向にさしつかえなく、いろいろちがった考えが併存するところに大学の自由と学問の発達が見出されるのであろう。

## 地 図 開 眼

幸 田 清 喜

ずっと以前のことで、しかもつい昨日のできごとのように新らしい幾つかの思い出の中から一つ — 白山の自作小屋での一夕、赤々と燃える囲炉裏の火を囲んで主人と私の対話 — 麦もソバのあとでは余り収量は出ないでしょう。小豆は？大豆は？といった私の質問に主人は素直に答えていた。一通り聞きたいことを聞いたので、明日の予定は、ここから坂道を下り小川を渡り、かや原を分け麓畑を右に見て…といったようなことを言うと、突然主人は「しまった」とどなった。そして「税務署だ。正直に言って手帳に書かれてしまった。明日起きがけに自作の途中にふれまわらなくては……」（数十年前すでに税務攻勢はこのような奥山までも見逃がすものでなかったらしい。）

私はふれまわられてはかなわないと思った。身分証明書なども見せて陳弁これつとめたが一向に埒があかない。「どうして私が税務署なのか」と聞くと、「あんたここへは初めてだと言いながら、土地の様子を何もかも知っているではないか。税務署に違いない。」と言う。そこで私は種を明かし、「この五万分の一の地図にみな書いてある。」と言って地図を見せた。「曲がりくねった線ばかりではないか。ごまかされないぞ。」と言いながら一体この線は何だろうといぶかる主人の好奇心に私は教育の可能性をみた。それから学習段階にはいる — 等高線だ、崖だ、広葉樹林だ、桑畑だと学習が進むにつれ主人の目がだんだん輝き出してきた。ここまでくれば、もう占めたもの、主人の目が輝きを増すに応じて私の態度が次第に横柄になってきたようである。小一時間ばかり講義して、さて最後にとどめをさす思いで「これがあなたのこの家だ。」と教えた。こんな小屋まで出ているとは…勿体ないと主人絶句。やがて「この地図を譲ってほしい。」ときた。「これは中々手に入らない。入ってもひどく値が高い。」と私、「いくら高くても是非とも」と主人、私は頃合よしと見て白状した。 — 「一枚13銭、金沢でも小松でも売っている。」 — 私は山から下りてすぐ白